

## ウルク・ワールド・システム —エジプトの場合—

高宮いづみ

The Uruk Word System :  
A Review from Egypt

Izumi H. TAKAMIYA

ウルク・ワールド・システムについて、前4千年紀のエジプトの場合、これがどの程度当てはまるのか実際のな部分から簡単に論じてみたい。

エジプトは、南メソポタミアからは直線距離にしても1千km以上も離れた場所にあり、南西方向にウルクの影響が及んだ地域の最も遠いところに位置する。影響が達したという意味で、エジプトはウルク・ワールド・システムの「周辺」に位置することになるが、その影響の実体はどのようなものであったのだろうか。従来、エジプトからは、ウルクあるいはその周辺のメソポタミアもしくはイランの影響を受けたと考えられる出土資料がいくつも挙げられている一方、メソポタミアからは、ほとんど前4千年紀のエジプトとの接触を示す資料が検出されていない。そこで、エジプトからの出土資料を概観してみる。

これまでに、土器、円筒印章、ラピスラズリ、建造物表面のモザイク装飾用土製釘、図像モチーフ、ニッチ建造物、文字が、メソポタミアもしくはイランからの影響を示す主要な要素として挙げられてきた。しかしながら、こうした要素を含む出土資料の多くは、実際の搬入品ではなく、エジプトで製作された模倣品であることが知られている。唯一、多数の資料が搬入品であることがほぼ確実なのは、アフガニスタン産と想定されるラピスラズリのみである。そして、このラピスラズリでさえも、検出遺構数は全体の1%に満たない100ヶ所あまりの墓を数えるのみであり、さらに大半の出土遺物は小さなビーズである。

上記のように、エジプトから出土したメソポタミアもしくはイランとの接触資料を概観すると、まずは搬入品が量的に極めて少ないことが認識される。ときにこれらの要素は稀少品あるいは威信財として特別な価値を持っていたかもしれないが、あまりにも少ない搬入量からは、それらが大きな経済的影響をエジプトに与えたとは推測しがたいであろうし、それらが直接接触の結果ではない可能性もある。

一方、理念的には、前4千年紀後半の、初期国家形成期に当たるエジプトにメソポタミア(ウルク?)が与えた影響は小さくないかもしれない。模倣品といえども、図像モチーフはエジプトの王権成立に関わる重要な遺物に用いられており、印章や文字が王朝時代の行政組織運営に大きな役割を果たしたことを勘案すると、初期国家形成に少なく

とも何らかのインパクトを与えたことは確実である。

もとよりウルク・ワールド・システムの考え方においては「中心」と「周辺」の経済的な関係が重要であるから、上記のようにエジプトは縁辺部に位置しつつも、経済的関係を媒介としたウルクのワールド・システムに効果的に含まれていたとは考えられない。ここに、近年論じられている Distance Parity の実例を見ることができるともかもしれない。

前4千年紀のエジプトでは、ウルクとの接触を持つよりも前からすでに複雑な社会形成に向けて急速な内部変化が始まっていた。メソポタミア社会との接触はそこに有益な情報をもたらしたかもしれないが、それがエジプトの経済構造の根幹に直接影響を与えることはなかった。むしろ当時のエジプトは、自らが中心として、下ヌビアや南パレスティナなどの周辺に影響を及ぼす別のワールド・システムを形成しており、2つのワールド・システムは互いの縁辺部において接触しつつも、独立した存在であったと言える。

「世界システム」の考え方を、当初 I. ウォーラーステインが用いた近代よりも前の時代に当てはめることの是非については多くの議論がある。前4千年紀のエジプトについて言えば、下ヌビアや南パレスティナにおいて、複雑化しつつあるエジプトが資源を求めて南北領域の開発を進めた結果、これら周辺地域の社会構造に大きな影響を与えたことはほぼ確実であるようだ。したがって、ある限られた地理的範囲でワールド・システムは当てはまるかもしれないが、下ヌビアと南パレスティナとでは、エジプトの影響以前の状況も、エジプトの開発の方法も、またエジプトが両者の社会に与えた影響もおそらく同じではない。それゆえに、ワールド・システムの概念をもって周辺地域の文化的・社会的変化が説明できる範囲は内容的にも限られており、歴史学的な見地からは、ワールド・システムの概念で全てをくくるよりも、もっと具体的な相互関係から周辺地域の様相を明らかにしていくことが望まれるであろう。

近畿大学文芸学部  
Kinki University